

明治学院の現状と今後

真崎隆治

中身が見えない

[真崎]はじめに、本学の困難な状況について触れてみたいと思います。

今年度私の所属している広報委員会に、「明学をアピールするポイントを検討していただきたい」といった趣旨の学長諮問がなされ、半年ほど話し合ってきましたが、結局見つかりませんでした。(笑)たとえばキリスト教主義教育といっても、それを現代に向かって説得的に語れているでしょうか。前学長の就任直後にも明学のキャッチフレーズ募集があつて、あのときも一つも応募がなかったはずです。つまり、今の明学にはとりたてて語るに値する中身がないということです。

しかし、これでは身も蓋もありません。そこで、ないなら自ら創り出そうということになり、委員会で後でお話するアイデアが出されました。しかしながら、これだけでは教育・研究の場たる大学としての明学の全体像を強力にアピールするものとしてはやはり不足の感を否めませんでした。

どこにその原因があるのでしょうか。たとえば、自らの存立を図るとき、他の動向の把握も必要ですが、この点明学の反応は鈍いというしかありません。あわてて真似したときにはもう遅いのです。明治のころの本学は他に先駆けて新境地を切り開いてきました。現在は他大学の後追い専門で、自らの主体性をもって打ち出したものがどれだけありますか。「なあなあ」のレベルで一応何でもそろってはいるけれど、真に魅力あるものは何がありますか。これではこの厳しい競争の中では埋没するのみです。私達が埋没するのはともかく、この大学に

思いを抱いて入学してきた学生たちになんの申し訳が立ちましょう。

不思議なのは本学の企画部門が判然としていないことです。学部長会ですか、学長・副学長などの執行部ですか、いずれかの事務組織ですか。外部から見ていると見えません。つまり、責任ある企画部門がないということです。少なくとも私たちの見えるところには。そして、こうした部門はある程度透明でなければなりません。そうでなければ人の心は集まらず、したがって叡知も集まらないことになります。

ところで、アピールといっても、なんでもいいわけではありません。先日山手線で驚くべき電車に乗りました。その車両の広告の全てが大学案内なのです。いや、それどころか、一電車全体が大学案内広告なのです。

〔#〕一つの大学ですか。

〔真崎〕いいえ、10校ほどです。一瞬仰天しましたが気を取り直してよく読んでみて呆れました。なぜなら、どの大学も「あなたの個性を育てる」と訴えている。なんと非個性的な個性尊重宣言でしょうか。これと「自由を大事にする」と「最新テクノロジー満載」とで大体おしまい。多少のニュアンスの差はあっても、基本的にはどこもが判で押ししたようにこれだけなのです。これなら明学を鮮やかにアピールするチャンスあります。執行部にはこうしたところにぜひ目をつけていただきたいのです。

学生の質の低下

ところで、当今の大学の危機は学生の質の低下でしょう。受験生人口激減に、大学を希望する生徒のパーセントの増加が重なって、質の水増し状況がおこっていることはご承知のとおりです。いわゆる大学の高校化の問題です。それは、明学だけでなく、全国的な問題であり、世界的な問題でもあ

ります。

明学での現実をもっとも端的に語るものとして、悲しいながら、私の所属しているフランス文学科の問題を例としてお話しなくてはなりません。20数年も前には、仏文の合格ラインの偏差値は60点を超えるかどうかの問題でした。だいたい58～59点で、60点を超えない歯がゆさを感じていました。当時は、50点を切る大学などは話にもならないという意識がありました。ところが、今年度、その50点を切ってしまったのです。偏差値がその学生のすべてを語るものでないことは重々承知ながら、今回はさすがにショックでした。

フランス語の文法は、私が学生のころは週1コマの授業で、前期の10回ぐらいで全部終わってしまい、後期はモーパッサンなんかを読むんですが、今は、フランス文学科では、週2コマで1年間かけてやっと終わるのです。そんなにゆっくり懇切丁寧にやっても、学生からは「早すぎる」「わからない」「ノートがとれるように話してほしい」といった注文が必ず出てきます。特にここ数年それが目立つようになりました。

こうした学生たちに旧態然としたカリキュラムを提供してはどうなるものでもありません。明学に来る学生の質とか、何を大学に期待しているかなどをよく調査して、それへの対策を早急に講ずる必要があります。その答えの一つとして、私たちは学部教育の基本を「教養教育」におくことにしましたが、しかしその言葉で語られるものの実態はいまだしであり、そのためにつくられた組織も十分機能してはいえません。なぜ言葉のみなのか、なぜ機能していないのか。それは大学改革が学部の充実を図るレベルにとどまっただけで、明学全体としていかなる大学であろうとするのかの視点が欠落しているからではない

でしょうか。ただし大学は学生に迎合してはいけません。迎合ではなく、受け入れることです。受け入れるとは責任をもつことです。学生の実情を嘆く前に、なすべきことは多いと思います。

学生生活の沈滞

さて、歴代の学長、森井先生も福田先生も大場先生も、課外活動を重視して、学問と課外活動とは大学教育の両輪であると申されましたが、両輪論はお題目としてあるのみで、実際には課外活動は沈滞の一途をたどっていきました。スポーツは結果がはっきりしているのだからわかりやすいと思いますが、全国のトップレベルにあった野球部は今リーグのどんづまりの最下位で、日本で唯一監督不在の大学チームであり、かつてスポーツ新聞が一面をさいて活躍ぶりを称賛してくれたラグビー部もはるかに低迷、多くの学生が熱烈な応援に駆けつけていたアメフトもどこにあるのかわからないありさまです。普通の努力で高いレベルにあったものをわざわざ意図的に貶めた代償に明学は何を得たのでしょうか。あのレベルまで回復するのは並大抵のことではありません。「持つ者はますます持ち、持たないものはますます持たなくなる」の典型です。大学はこのことに責任があります。

他方、管弦楽部は、昨年でしたか、全国一位の表彰を受けました。白金通信に小さな記事で紹介されていましたが、皆さんお気づきでしたか。（当該部の顧問である橋本茂先生を除いて全員が首を横に振る）こうした素晴らしい出来事をどうしてほとんどの人が知らないのでしょうか。これでは学生の大学生活は教室に限定され、キャンパスは活気を失い、そうなると大学の活力そのものが弱まってきてしまいます。学問の場という共通の土壌の上で、さまざまな人々のさまざまな才能なり可能性なり

を十全に発露させていくのも、今日の大学の大切な役割ではないのでしょうか。

貧乏所帯

脇田学長になられて、一年も経っていませんから、先行きはまだ見えてきませんが、いやというほど分かせていただけたのは明学が貧乏だということです。（笑）たしかにお金はないんだと思いますけれど、ただ儉約すればいいというものでもない。入試の弁当なども寂しくて、もう力が出ない。（笑）

冗談はともかく、金がないから儉約せよではなく、この困難な時代にわれわれは何をなすべきかの指針を明示し、そのためにしかじかの予算でどこまで出来るか工夫しろというのであれば、私達だって一所懸命考える気にもなりますが、こここのところ聞こえるのは、金がないから余計なことは考えるなといったことのように、これでは気が失せていくばかりです。

明学がなんらかの魅力を社会に示すためには、人的努力の他に当然ある程度の出費もかかりましょう。しかし、金がないからそれをしないでいると、魅力のないところに人はますます集まらないことになり、それがさらなる収入減につながり、かくしてじり貧の道をまっしぐらということになります。財政を引き締めることは大切です。しかし、同じ儉約といっても、機械的な削減ではなく、儉約の意味が生きるような儉約の仕方がなされなければなりません。それが知恵というものでありましょう。

たとえば派遣社員のことですが、嘱託職員の契約問題をずさんにしてきたツケからか、たんに費用削減のためからか、派遣社員がクローズアップされてきました。ここにおられる白岩さんは派遣社員として入られて、今は正式の職員になられたとのことで、ほんとによかったと思います。私のい

るフランス文学科でもこの問題を現在抱えていて、横浜の研究室は研究アシスタントではなく派遣社員でと言われました。しかし、これがいかに現実を無視したものか。アシスタントだとお金がかかるといいますが、派遣社員と驚くほど違うものでもありません。それに、フランス文学科の場合、フランス語がある程度は出来ないと困りますが、フランス語のできる派遣社員となると、能力給が加算され、かえって高くなります。したがって、儉約の問題にはなりません。次にこれこそ最も大切なところですが、学生と接する教育現場を派遣社員ですませられると仮初めにも考える人がいたら、その人は大学から去っていただきたい。これこそ本末転倒のとんでもないことです。成績関係から住所録などのさまざまなマル秘資料のある場所に派遣社員とかアルバイトといった、本来的には責任を負わない人が一人だけにいることは問題です。また、個々の学生の問題に柔軟に対応し、教員との橋渡しをしなければならないのに、派遣社員にそんなことお願いする方が無理というものです。この度改善の動きがあるとのことで、まずはほっとしました。キリスト教研究所でも随分苦労しましたから、皆さんよくご存じのことですが、これまではこんな簡単明瞭なことさえまともに聞いてもらえなかったのです。お金だけでなく、時間や無意味なことをすることも儉約するのが本当の儉約でしょう。「時間」と「意味」は知恵から生まれます。それこそ私たちにできることではありませんか。

たとえばボランティアなど

さて、少しは建設的な側面にも触れることにします。はじめの方で、広報委員会でのアイデアについて後に触れると申しましたが、つまり、明学全体を社会に強烈にアピールするイメージをどうつくるかという

ことでした。明学の一番のポイントはやはりキリスト教主義に基づく人格教育ということになりましょう。これは、現在も有効な課題だと思います。ただし、これをどういう形で具体的に提示できるかっていうことです。

キリスト教主義というのが、キリストの愛に感動して、「自分を愛すると同じように隣人を愛する」ことを自己の存在および行動の原点におくことだとすれば、それは他者との関係を愛において構築することであり、他者へ注がれる眼差しが他者への心を尽くした具体的行為となって現れ出ることにはほかなりません。それはどこかの国の総理が言っている義務としての奉仕ではなく、真の意味でのボランティア活動に重なりゆくことであります。本学にはすでにボランティアセンターがありますね。これは本学が大事にしているものを世間に認識してもらえる重要な役割を担っているのではないのでしょうか。えー、あれは何と申したっけ、山崎先生、ボランティアセンターにおられて指導してくださる方のこと・・・」

[山崎] コーディネーター。

[真崎] あ、そうでした。そのコーディネーターを置いている大学はまだほとんどないというなかで、明学は置いていることが新聞で評価されていました。素晴らしいことです。それにジュンコスクールのことも朝日新聞で大々的に取り上げられたりしています（注：1月に入ってこの記事がシチズン・オブ・ザ・イヤー賞を受賞したとの朗報が入りました）。

そこまで整備されてきているなかで、私になお分からないのは、大学がボランティア活動をどのような意味で教育のなかに位置づけているのかということです。ボランティア活動を授業を犠牲にして行った場合、たとえば地震のように突発的な事態に

対応した学生に対してどう配慮するのか。それが試験期間であったらどうするのか。それとも明学の学生のボランティアは授業に差し支えない範囲での、学内での身障学生へのサポートとか、近隣の施設への訪問とかがふさわしく、それを超えるものは望ましくないというのでしょうか。大学としての姿勢がはっきりしていればどちらでもいいのですが、私の思いでは、身障学生へのサポートはわざわざ「ボランティア」というまでもなく、明学の学生であればごく日常的な行動であってほしいところです。せっかくの組織もそれを生かす理念がしっかりしていないと半端なものになりかねません。

広報委員会では、すでに根づきつつあるボランティア問題を、今述べたような意味でさらに全学的な取り組みとしてゆけば、相当のインパクトを世間に与え得ると考えています。ただし、これは望ましい場面の一つにすぎません。こうした自主的な姿勢が随所に現れてくるといいと思います。

たとえばこの学校ははるかアメリカの地から東洋を見つめた一人の人の情熱によって生まれました。その明学は先に中山先生のもと、戦争責任の告白をしました。韓国平和の旅を重ねており、ソウルには提携校があり、北京大学とも縁があります。それらを基盤として、今の日本に欠如しており、しかも必要ななものかを率先して創り出していけないものでしょうか。先の新設学部構想の中で、朝鮮語コースの新設が謳われながら実現しなかったことはかえすがえすも残念なことです。たしかにさしあたりは学生を集めることも困難でありましょうが、20年、30年の将来を思うとき、今こそ他に先駆けて創っておく時ではなかったかと思えてなりません。

一貫教育

さて、教育は一人の人間の個性や可能性を見据えながら時間の経過のなかでその子にふさわしく成長をサポートするものであって、それこそが個性教育というものであり、その人間の成長や変化は人工的に定められた小・中・高・大のセクションの変化と必ずしも一致しません。下級校は上級校へ行って、その子が支障なく学業ができるように指導し、上級校はその子の受け入れにおいて、その個々の適性や能力を見極めてふさわしい教育指導を行わねばなりません。しかるに、文部省のおしつけるカリキュラムは人の血の通う現場に関わりなく、およそ機械的なものであり、それが大学の高校化を招いている元凶といえるのではないのでしょうか。たとえば、今回の新学習指導要領は、なんだか勉強しちやいけないと言ってるみたいで、それで大学に入ると、明学は Semester 制で、短期間に集中的にがんがんに勉強しろっていう。(笑) このギャップってすごいんですよ、学生にとってには。

ここで私立学校は私立に許されるかぎりの自由を行使しなくてなんのための私立でしょうか。明学では、中学・高校・大学と一人の人間が通過しながら育っていくのを見つめられるところです。人間の通り道を制度で分断してはいけません。それぞれの領域での意義は個々にあっても、全体として一貫した流れであることが大切なのです。お互いに干渉しあうのではなく、信頼しあい、理解しあい、しっかり引き継ぎながら、一人の人を育てていくのです。

これまでも一貫教育は叫ばれつづけてきましたが、それが常に大学入学のための陳情になってしまったのは、「明治学院」としての教育理念が曖昧であったことと、大学教員の奢りに原因があります。今、大学・高校・中学の各教員が同じ教育者という

立場で教育現場の問題として真剣に語り合うことが切に求められるのではないのでしょうか。

一貫教育への真摯な取り組みが始まれば、明学の教育環境はだいぶ変わってくることでしょう。そういう中でこそ、一人ひとりの学生にとって意味のある教養教育も実現していくことでしょう。教養は積み重ねのなかで実現されていきます。教養こそが一人の人間そのものの存在の基盤なのです。教養教育を考えると、大学の高校化などというのはたいした問題ではなくなります。現状への迎合からではなく、私達の主体性において教育を行う場としての現代の明治学院を世間に明瞭に示していきたい。そして、教養教育がしっかり行われていく土壌の延長上に、大学院をはじめとする種々の専門教育が大きな可能性をもって開けてくるのです。

(まざき たかはる 所員・文学部教授)